
発達理論の学び舎

Back Number: Vol 64

Website: 「[発達理論の学び舎](#)」



目次

- 1261. 人工知能と発達測定
- 1262. 人工知能に対する不気味な関心
- 1263. 光の織物: 存在が光になるまで
- 1264. 社会的な情報遺伝子「ミーム」について
- 1265. 夢と現実世界の連鎖的流れ
- 1266. 人工知能についての再考
- 1267. 創作と他者
- 1268. 数年後の活動と今日の活動
- 1269. ゲラルド・ヤングの書籍より
- 1270. 夢の中での思考
- 1271. エーリッヒ・フロムの仕事から
- 1272. 自己言及と知識の体系化
- 1273. ハイドンとフロム
- 1274. 個
- 1275. 夢と現実が織りなす一つの現実世界
- 1276. 人間が真に人間になる時
- 1277. エグゼクティブマインド
- 1278. 「懐疑」のための方法論の形成へ向けて
- 1279. 夢と現実の境界線
- 1280. 点・線・面・立体を構築する自己組織化能力

早朝の空を覆っていた雲が嘘のように消え去り、昼食前から晴れ間が広がり始めた。先ほどスーパーで四日分の食料を買い、これから四日間は外に出る必要はなさそうだ。金曜日に大学のセレモニー参加する予定であったが、それへの参加の動機が極度に落ちている。そうしたこともあって、数日間の食料を購入したという経緯がある。

帰宅後、昼食を済ませた私は、人工知能についてあれこれと考えていた。人工知能について考えることになったのは何かの偶然であるが、発達科学を適用した能力測定の手法を活用する際に、人の手を使って分析作業をすることに限界があると最近強く感じるようになっていた。それはもちろん、分析を一つ一つ手作業で進めていくことに伴う時間的制約が一つある。今のところ、発達科学の知見を活用した能力測定において、分析の判断は人の手を用いて進めていかなければならない。

私が在籍していたレクティカでは、随分とコンピューターを活用し始めていたが、それでも能力測定に際しての回答を読むのは分析者であり、それを判断するのも人であった。つまり、コンピューターが回答を読み、それに対してコンピューターが判断を下すというような次元には至っていなかった。

発達科学を取り巻く能力測定には、まだまだアナログ的なところがあり、まずはそのような制約があると言えるだろう。もう一つの制約は、人の判断に伴う正確性に関する問題である。

フローニンゲン大学での最終学期に履修していた「タレントアセスメント」のコースの中で、何らかの診断を行う際に、人の情報処理能力がいかに頼りないものかを痛感させられる論文をいくつも読んだ。私たち人間には、変数を特定するような能力が備わっていたとしても、複数の変数を組み合わせる一つの解を導いていく能力はそれほど優れていない。それどころか、そうした能力においては、コンピューターに圧倒的に劣後する。そうしたことを考えながら、人工知能を活用して能力測定を行う道を模索していた。

結論から述べると、それは理論的には容易であるように思えた。これまで私は、発達段階モデルを用いて、かなり多くのデータに対して発達測定を行ってきた。しかし、一人の人間が数年間に分析してきたデータというのも、数としては大したことはなく、コンピューターに機械学習をさせれば、私

の数年間のデータ量など、コンピューターにとってはほんの数日程度—あるいは数時間程度—のものだろう。

第二弾の書籍『成人発達理論による能力の成長』の第三章で取り上げた能力レベルの測定に関する事例は、実際に私がこれまで行ってきた分析を極めて単純化したものである。そこで紹介している発話事例—もしくは記述事例—をある程度の量準備し、それをコンピューターに読み込ませ、機械学習をさせていけば、人間が行うよりも圧倒的な速度と正確さで能力測定が可能になると予想される。これは、比較的容易に実現可能だと思う。

カート・フィッシャーのダイナミックスキル理論を活用した発達測定は、発話内容と発話構造の双方を分析していくことに特徴を持つが、それら二つの分析は、いくつかの法則性に着目してなされるがゆえに、それらの分析はコンピューターが最も力を発揮しやすい分野なのではないかと思う。

最初のうちは、発達科学の専門家がコンピューターに分析の観点と手法を教育し、それ以降は、コンピューターが大量のデータをもとに自ら学習を進めていくようなプロセスが想像できる。そうなってくると、私のように発達科学を専門とする者が、発達測定に貢献できるのは、機械にその学習機会を提供する最初の段階だけとなるかもしれない。そのような日が近づいていることを確かに感じ取った。

そこからさらに、仮にコンピューターが圧倒的な正確さを持つ能力測定を行えるようになったところで、私たちはその分析結果を即座に正しいものとして受け取れるだろうか、という問題が浮上した。これは心を持つ人間の特性なのだろうか、私たちは必ずしも、正しいものを正しいものとして受け取らないという特性を持つ。コンピューターが算出した結果が圧倒的な正確さを持っていたとしても、私たち人間は、不正確な人間の判断の方を信じようとする傾向があることはまさにその例だろう。

コンピューターが、人間には処理しきれないような多数の変数を総合し、さらに正確性が担保された回答を提出したとしても、私たちはその回答よりも、人間の限られた認識能力がもたらす不正確な判断を信じようとする傾向があるのはなぜなのだろうか。

これまでは人の手を用いなければ不可能であった、発達測定に人工知能が進出し始めれば、人間を取り巻くありとあらゆる能力が数値化されることになるだろう。しかもそれは、高度な正確さを持つ

てである。そのような世界の実現は間違いなく近づいてきており、人間の発達を取り巻く今の私たちの道徳能力や倫理能力では、そうした世界の実現は戦慄をもたらすものだと感じているのは私だけだろうか。2017/7/5

【追記】

私が2015年にレクティカを離れて以降、レクティカのサービスも随分と進化を遂げているようであり、今ではもうアセスメントをほぼ自動化で行えるようになっている。ここからさらにAIの活用が進めば、リアルタイムで諸々の知性の変化を捉えることが可能になってくるかもしれない。これは能力の可視化という点だけを取ってみれば歓迎されることかと思うが、事態はそれほど単純ではない。

むしろ、あらゆる能力がリアルタイムで可視化されることは高度な管理社会の到来を予感させる。昨今はブロックチェーンの技術や仮想通貨が金融経済のあり方を根本から変えようとする動きをもたらしつつあるが、例えばブロックチェーン技術を活用して貨幣の使用と個人を完全に紐づけられる日が到来すれば、それはまた管理社会の恐ろしい一つの側面のように思えてくる。

科学技術というのは本当に恐ろしい性質を持っており、知性を持つ人間がそれを生み出すのだが、生み出された技術は人間の知性を上回る速度で進化し、その活用が爆発的な勢いで普及してくという特徴を持っている。私たちのありとあらゆる能力がリアルタイムで可視化され、仮にそれがトークン化され、金銭価値に対応する形で表示されるような日が来ることは本当に戦慄をもたらす。だが、そうした日が実現されつつあるのではないかと思う。フローニンゲン中央駅:2018/7/25(水)13:07

1262. 人工知能に対する不気味な関心

人工知能に関する不気味な関心が高騰し、人工知能を取り巻く哲学書をいくつか購入しようと思うに至った。実際に、インターネットを通じていくつかの哲学書の中身を確認してみたところ、あまり関心を引くものがなかった。というのも、人工知能を取り巻く道徳判断や倫理判断などを主題として扱っているものがあまり見つからず、哲学書というよりも、認知科学の観点から人工知能を扱っている専門書が圧倒的に多いことに気づいた。

脳科学の観点から人工知能を探究することに私はほとんど関心がなく、また人間の主観的な意識と人工知能の知性を比較する論点に関してもあまり関心がない。もちろん、後者に関してはこれまで

いくつかの書籍を読んできたし、実際に未だに書齋の本棚にはそうした論点を扱う専門書が置いてある。だが、今の私はそうした主題ではなく、人工知能が私たちに提供するデータや解析結果などを私たちがどのような発想の枠組みで活用すればいいのかということに関心がある。より大きな観点から言えば、私たちの社会は、人工知能をどのように受け入れ、どのようにそれを活用していけばいいのかという主題に関心がある。

米国では、人工知能がすでに裁判で活用されていたり、政策の立案に活用されつつあるようだ。この時、人工知能が提出した証拠データを解釈するのは裁判官であり、打ち出された政策を解釈するのは政治家であり国民である。結局、人工知能がもたらしてくれたものを最終的に解釈し、それをどのように活用するか判断は人間が下すことになる。そうすると、私たちは、「解釈」や「判断」という古典的な哲学上の問題と向き合わざるをえないのではないかと思う。

こうした問題と真摯に向き合わない中で人工知能を活用するというのは、ひどく危険なことのように思える。そうした状況が長引けば、いつの日か、人間が人工知能を活用するのではなく、人工知能が人間を活用する時が来るだろう。

人工知能に対する関心が奇妙なほど突然溢れ出し、少しばかり自分の意識が非日常的であることを感じる。自分という一人の人間がなすべき仕事は何なのか。今自分が取り組んでいることは、本当に自分という一人の人間にしかできないことなのかを問う自分がある。今このようにして書き留めている私の文章すらも、もしかすると人工知能によって作成可能なのかもしれないという思いが生まれる。いくら私とその瞬間の自分に固有な体験を書き留めようとも、人間に固有の主観的な体験についていくら主観的に文章を書き留めようとも、人工知能がそれを行うことも可能なのではないかという思いがやってくる。

書齋に美しく鳴り響くバッハの音楽も、人工知能がそれよりもさらに美しい曲を生み出すことは十分に可能なのではないかという考えが、聞いてはならない声のように自分の内側に姿を表す。

一人の人間がなすべき仕事、一人の人間にしか成しえない仕事は何なのかという問いは、私の内側から消えることなく、自らの存在に強く留まり続けているようだ。2017/7/5

1263. 光の織物: 存在が光になるまで

出版された書籍を過度に気にかけることをやめてから、再び平穏とした日常に戻りつつあることを実感している。意識が散漫になることなく、自分がなすべきことに集中できる日々が取り戻されつつあることはとても喜ばしい。

書籍に向かっていた精神エネルギーが、自らの仕事に向けられ、また自分の内側に向けられることによって、全てが再び順調に動き出しているを感じる。そうした日々の充実感を感じながらも、絶えず自分の内面を巡る問題について、様々な角度から様々な深度で向き合わなければならないことに関しては何ら変わりはない。

日々の生活がどれだけ充実していようが、そうした自らの内面に関する問題は消えることなく、それと向き合うことを私に突きつけてくる。幸福は自己を巡る問いと常に手を結んでおり、私が幸福感を感じる時には常に問いがそばにいる。そして、幸福感を感じられないような時にも問いがそばにいることを考えると、本当に人間の一生は問いに囲まれたものなのだということが理解される。いや、私たちの一生は、問いに囲まれているというよりも、問いそのものに他ならないと言えるかもしれない。

昨日、行きつけのインドネシアンレストランで昼食を購入し、それを持って自宅に戻ってくる時、ある家の庭にバラが育てられているのを発見した。そのとき、ドイツの詩人リルケが残した「一本のバラは全てのバラ」という言葉を思い出した。リルケのこの言葉は、敬愛する日本人作家の辻邦生先生に多大な影響を与えた言葉でもある。辻先生の著作を読む中で、私はリルケのこの言葉に何度も出会ってきたのは確かである。

しかし、その言葉は確かに素晴らしいと思うことはあっても、真にこの言葉の意味するものを自分の存在を通じて理解したことはこれまで一度もなかったように思う。だが、昨日目に止まったバラによって、リルケが残したこの言葉の意味することの一端が掴めたような気がしたのである。それは、何か私の中に大量に流れ込む感覚として知覚され、逆に、私から外側の世界に何か大量に流れ出すような感覚として知覚された。「一は全につながり、全は一につながる」という訳の言葉が、私の口からこぼれた。

私はもう一度、英語で出てきた独り言を日本語に変換し、再度自分に言い聞かせるようなことを行っていた。仮に、私の内側から生み出される一つの言葉が、自己を取り巻く大きな世界の中の貴重な部分であり、それでいて世界全体であるならば、自分の言葉を紡ぎ出していくことには大きな意味があるのではないかと思うに至った。

第二弾の書籍を執筆し、それを世の中に送り出したことに対して、ある種の虚無感に襲われていた私にとって、 Rilke のその言葉は啓示的な意味を持つものであり、私に光をもたらしてくれるものだった。今日も昼食時に、なぜ自分は日本語で文章を書き続けなければならないのかについて、大きな葛藤と対峙することになった。

これは米国で生活を始めた五年前からたびたび向き合ってきた問題であるが、今日もそれと向き合っていた。この問題と向き合う機会が増せば増すほど、この問題が解決されることはなくても、少しばかり希望の方向へ自分の解答が進んでいることがわかる。

その直後に現れた問題が、先ほど書き留めていた人工知能に関するものであった。自分の一生をかけて、自分の人生の全てをかけて成すべきことに関して、私は完全な光の中を歩いているわけでは決してない。だが、Rilke を含め、詩人や思想家の言葉の中に小さな光を見出し、そこで得られた光を、少しずつ自分の内側で大きな光として編み直していくようなことに私は従事しているのだと思う。この作業は、自分の存在が完全な光になるまで続くだろう。そして、その日がやってくるまで、私は光を求めることをやめはしないだろう。2017/7/5

1264. 社会的な情報遺伝子「ミーム」について

今日も一日中、文章を読み、そして書くことを行っていた。読むことと書くことを通じて、時間の中をくぐっているような感覚が絶えずあった。

夕方、涼しい風が、窓から書斎の中に流れ込んできた。その風を全身に浴びながら夕食を摂り終えた私は、今日一日を少しばかり振り返っていた。午前中から午後にかけて、ステファン・グアステロの“Managing Emergent Phenomena: Nonlinear Dynamics in Work Organizations (2002)”を読んでいた。先ほど、無事に一読を完了し、複雑性科学と組織行動論を架橋させるグアステロ教授の仕事には、いくつか自分の関心を強く引くものがあることに改めて気づいた。

本書を読み進める中で、イギリスの進化生物学者リチャード・ドーキンスが提唱した「ミーム」という概念を久しぶりに見かけた。ミームというのは、集合意識における遺伝子のようなものである。別の表現をすれば、文化的な進化をもたらす情報遺伝子だと言えるだろう。ミームは社会で共有される情報であるがゆえに、この社会の至る所に存在している。

学校というのは生徒にミームを共有する—あるいは埋め込む—場であり、企業組織というのも同様の働きを持つ。また、一つの国や地域には、文化という固有のミームの集積体があり、その土地に身を置くことによって、固有のミームを自身に取り入れることになる。

米国で生活をしてきた時以上に、自分の視点や観点の枠組みが変容し始めているのは、欧州という土地に固有のミームを私が自覚的に取り入れることによって引き起こされているものなのかもしれない、と思うに至った。仕事をする場を変えると、それまでになかったようなアイデアが閃いたりするのも、もしかするとその場その場におけるミームの作用によるものかもしれない。つまり、ある場所から別の場所に身を置くことによって、既存の場所にはなかったミームが自分の発想に影響を与え、その結果として、これまでにない発想が思い浮かぶのではないかと思ったのである。

ミームというのは、個人の意識に影響を与えるだけでなく、集合の意識にも当然ながら影響を与える。もともと、ドーキンスがミームに与えている意味というのは、文化的な進化をもたらす情報遺伝子としての意味である。例えば、新たな企業文化を創出する際には、ミームを保持する組織の文化的枠組みそのものを変容させていく必要がある。そのプロセスは、個人の認識の枠組みの変容とほぼ同じであり、組織内に新たな知識や経験が注入され、既存の文化的枠組みでは対処しきれない状況を作り出すことが必要となる。

ジャン・ピアジェが提唱した「同化」と「調節」という概念を用いれば、既存の文化的枠組みで対処仕切れるような情報は、同化しかもたらず、新たな文化が創出されることはない。一方、既存の文化的枠組みでは対処できない情報が組織にうまく流入する時、調節が起こり、新たな文化的枠組みを生み出し得る。

こうした情報遺伝子を組織内にもたらし、それをうまく循環させるのは、やはり内部の人間同士のコミュニケーションであり、内部と外部のコミュニケーションがカギを握るだろう。ミームについては、組

織的・社会的なシャドーと関係する概念であるがゆえに、今後もこの概念についてことあるごとに触れることになるかもしれない。2017/7/5

1265. 夢と現実世界の連鎖的流れ

早朝、目を覚ますと、少し寝すぎてしまったかと思ったが、時刻は五時半であった。そのまま起床し、寝室の窓を開け、一日を開始させた。早速、小鳥の鳴き声が辺りにこだまし、清らかな朝だと実感した。昨夜は夢の中で、体育館で運動を行っていた。おそらくそれは、授業の一環だったと思う。

授業が終わり、体育館を後にしようとした私は、教師に呼び止められた。何やら私は、クラスに遅れて参加していたらしく、それを埋め合わせるための課題に取り組まなければならないということだった。実は、体育教師に遠くから名前を呼ばれた時、その呼びかけを無視してその場を後にしようとしていた。だが、しつこくその教師が私を呼び、走って追いかけてくるのがわかったので、一応その場で立ち止まり、教師の話を聞くことにした。

明日は土曜日であるにもかかわらず、提出期限は土曜日までとのことであり、この課題を教師にメールか郵便で送らなければならないことになった。私は、他にも取り組みたいことがあったため、この課題をひどく面倒なものだと思った。自己の無能さを他者に投影するかのごとく、この教師は相変わらず無能だと思った。自宅に戻り、課題の内容を確認すると、やはり取り組むに値しないものだとわかったが、すぐさまそれを済ませた。

課題を済ませた私は、それをPDFにし、教師にメールで送ろうと思ったが、教師のメールアドレスを私は知らなかった。そのため、自宅の近くにある郵便ポストに課題を投函しに出かけた。郵便ポストに到着すると、一匹の白い小型犬とその飼い主が近くを通りかかった。その小型犬は、私のカバンに興味を示し、私がかがみながら課題をカバンから取り出そうとすると、その小型犬が私のカバンに顔を突っ込み始めた。

それはとても愛らしい姿であったが、しつこくカバンの中を探索していたため、そっと小型犬の頭をカバンから離した。その間、飼い主はうんともすんとも言わず、無表情のままその場に立っていた。

こちらから挨拶をすると、片言の日本語で返事をし、その中年女性は中国人であることがわかった。その瞬間、夢の場面が変わった。

次の夢の中で私は、銀座の街にいた。中学校時代の友人と銀座の街を歩いていると、その友人が新しい職を得たという話をし始めた。どんな職を得たのか聞いてみると、自動車販売の職らしい。友人曰く、二年後あたりにその店の店長になるそうだ。ちょうどその店が、銀座の街の一角にあるため、そこに立ち寄ることにした。

この店では新車の販売のみならず、銀座の街に不法投棄されている車両を集め、それらの車両を点検・整備した後に販売することも行っていた。ちょうど私は、一台の不法投棄車両の点検に立ち会うことができた。その車は、まさに今その店に到着したばかりであり、誰もその車の中を確認していない状況だった。その不法投棄車両を見たとき、こうした車を点検するプロセスの中で遭遇するであろう事態を想像すると、私は少しばかり恐怖感を覚えた。

というのも、その車両から何が検出されるかがわからず、得体の知れないものが出てくる可能性もあると思ったからだ。私が想像していたのは、銃器などが発見されることではなく、人の遺体が発見されることだった。そうした不気味な想念に取り憑かれながらも、私は点検現場を静かに見届けていた。幸い、車両から何も不審なものは見つからなかった。

そこで私はある意味、不気味な好奇心に惹かれるままに、車両を点検していた若い男性に、「これまで不法投棄車両を点検する中で、最も恐怖心を覚えた発見物は何でしたか？」と質問した。その質問に対し、その男性は少し戸惑った様子を見せながらも、苦笑いで答えを述べようとした。その答えを述べる一瞬前に、その回答が私にはわかった。それは、切断された人の片腕であった。その回答を男性が述べようと口を開いた瞬間に、夢から覚めた。

書斎の窓の向こうには、黒々とした重たい雲が広がっている。しかしそれでいて、私の自宅の上の空は晴れているようであり、太陽が顔を覗かせている。太陽光が、赤いレンガの家々の屋根に降り注いでいる。屋根の上に、二羽の黒い鳥が止まった。それら一連の景色の流れが、どこか先ほどの夢の内容と連鎖しているように思えた。2017/7/6

昨日は、気づかないうちにいつもの二倍ほどの分量の日記を書き留めていた。字数にしておよそ一万字ほどの日記を書き綴っていたことになる。それらの文章のほぼ全てが、自分が書き留めておくべきことだと思ったことである。ただしその中で、書こうとする自分の内側の動機、すなわち、内側の思考や感覚が外側に形となって表出されることを希求する度合いのようなものが弱い場合、それは色濃く文章に現れることがわかった。

それは力の無い文章であったり、言葉同士のつながりに違和感を覚えさせるようなものとして現れる。やはり日記を書き留める際には、内側から湧き上がる自発的な表現欲求に沿う形で文章を書き進めていかなければならないと改めて思った。次から次へと湧き上がる言葉の流れに乗るためには、内側の強い表現欲求が必要であり、それに純粹に従うことが必要となる。昨日は、夕方あたりにいくつか人工知能に関する日記を書き留めていた。

今朝改めて、昨日の問題の続きを考えていた。どうやら人工知能の問題は、私を探究に駆り立てるものと関係していることがおぼろげながらに見えてきたのである。

人工知能の能力を前にした時、今の私が、自分の知識と経験をまとめ上げ、知識体系や思想体系のようなものを構築していくことに何か意味はあるのかと否定的な感情を抱いた。そのような体系を自らの内側に構築していくことはほとんど意味がなく、自分が全てを捧げて構築した体系よりもはるかに洗練された体系を人工知能はいつも簡単にその内側に生み出すことができるだろう、ということをも思った。

しかし、いくら人工知能が高度な情報体系を自らの内側に構築したとしても、その体系から生み出されたものを解釈し、それを活用するのは人間であることを改めて考えていた。人工知能が私たちに提出するデータや分析結果をいかに解釈し、どのようにそれを活用するかの判断は、私たち一人一人に委ねられているのだと思う。その際に、私たちが人工知能に活用されるのではなく、私たちが人工知能を真に活用していくためには、利用者それぞれの知性が重要になるだろう。特に、人工知能が提出する情報の影響力が大きいものに関しては、その情報を扱う者には叡智が求められるように思う。

科学者や実務家としての自分を省みたとき、人工知能の情報を的確に解釈し、それをどのように活用するか判断と方法は、やはり私のメンタルモデルの質に大きく左右されるように思えた。ここで述べているメンタルモデルとは、認知的なもののみならず、道徳的なものや倫理的なものを当然ながら含む。

そうしたメンタルモデルを洗練化させ、高度化させていく取り組みは、やはり自分に求められることなのだと思う。これは、人間と人工知能の共存という古典的な問題なのかもしれないが、人工知能が発達すればするほどに、人間が生み出すメンタルモデルよりも遥かに高度なものが人工知能の中で生み出されることは間違いないが、そうだからこそ、人工知能と共存し、それを活用する私たちには、洗練されたメンタルモデルが強く求められるように思う。そうでなければ、読みに読み、書きに書くことを行う今日のこれからの一つ一つの活動が、全く意味のないものになってしまうだろう。2017/7/6

1267. 創作と他者

早朝の黒々とした雲がどこかに消え、薄青い空が広大に広がっている。七月に入って一週目が終わろうというのに、相変わらず涼しい日々が続く。太陽の光を観察してみると、そもそもそれは夏の激しさを持っていない。日本で言えば、ちょうど冬が終わり、春に向かおうとする時の太陽光のようである。

書斎の窓から見える木々たちが、そよ風のリズムに乗るように、一斉に緩やかなダンスを踊り出す姿は、私の心を落ち着かせてくれる。早朝、ゲラルド・ヤングの“Development and Causality: Neo-Piagetian Perspectives (2011)”という800ページに及ぶ分厚い本の二読目を開始させた。最初から隅々読み返すというのではなく、今の自分が最も関心を持つテーマを中心に再読を始めた。すると、ダイナミックシステムの発達プロセスに関する記述を読んだ時、父が昔創作したルアーに関する記憶が突然甦ってきた。

父が作ってくれたルアーの中で、最もお気に入りだったのは、ポッパーという水面に浮かぶタイプのルアーだった。それを持って近所の沼や湖に行き、父が作ったルアーで実際にブラックバスが釣れた時の歓喜の記憶が蘇ってきたのだ。ダイナミックシステムの発達プロセスに関する記述を読みな

がら、なぜそのような記憶が蘇ってきたのかは定かではない。だが、記憶を司る脳と心のシステムがダイナミックシステムであるがゆえに、そうした記憶の非線形的想起も全く不思議なことではないと思う。

いずれにせよ、過去の記憶を思い返しながらか、つくづく当時の父は、浮力に関する物理的な知識を活用してルアーを作っていたのだ、と驚嘆の思いに駆られた。また、そこから当時の父は、おそらく創作の喜びを絶えず感じていたのではないかという思いも湧き上がった。

先日、ライデンの国立古代博物館を訪れた際にこの目で見か、古代エジプトの所蔵品の強い印象が再び蘇ってきた。古代エジプト人が残した数々の創作物を見たとき、「人は創作することを宿命づけられた生き物である」という言葉が自ずと漏れてきたことを思い出す。

数日前に、出版記念オンラインゼミナールに向けて、Preziを用いて説明資料を作っている最中、自分がなぜあれほどの喜びを得ていたのかという理由を知る。また、毎晩の作曲実践がなぜあれほどまでに喜びをもたらすのかの理由を知る。それらは全て、創作に関係しているからだ。専門書や論文を読んでいて絵も言わぬ歓喜の感情が絶えず生じるのは、今このようにして文章を書くという創作と密接に結びついているからだろう。

なおかつ、その創作が他者に何らかの形で資することを知るとき、喜びの感情は頂点に達し、それはもはや喜びとは形容できない無形の至上的感情に変容される。この至上的感情の中に私は、フランスの哲学者エマニュエル・レヴィナスの思想に相通じるものを見て取った。

私たちは、創作を通じて、他者に資することを宿命づけられた存在なのだろう。創作と他者という存在こそが、自分の日々の活動の根源にあることはもはや疑うことはできない。2017/7/6

1268. 数年後の活動と今日の活動

専門書を読んでは取り留めもない考えが頭をよぎり、それを文章に書き出しては、また専門書に戻り、そして再び自分の取り留めもない考えと向き合うようなことが絶えず繰り返されていく。自己から離れ、自己に向かうという、自己からの離反と接近の永劫的な繰り返しの中で人は生きていくことを

宿命づけられているのかもしれない。そのようなことを思っていると、昼食の時間が迫ってきていることに気づいた。

今日は五時半の起床からここまでの間、普段と同じように文章を読み、そして書くということを絶えず行っていた。その際に思い浮かんでいた取り留めもない考えとして、ハイデガーの“Being and Time”とプルーストの“In Search of Lost Time”をゆっくりと読みたい、という思いが湧き上がっていた。二つの書籍に対して、解析的かつ実存的な読みを試みたいと強く願う自分がある。後者の書籍に至っては、私はまだ所有してない。

以前偶然にも、米国のある大学の哲学科に、ちょうどこの二冊の書籍を取り上げたコースがあることを知った。一つは“Being and Time”を精読する形でハイデガーの思想に迫り、もう一つは“In Search of Lost Time”を精読する形でプルーストの思想に迫っていくというものだ。そのようなコースがあることを偶然知った時、私はなぜだが、自分がその大学に数年後在籍しているかもしれないという思いに捕らえられた。数年後、その大学で私はもしかしたら、これらの二冊の書籍を精読するような機会を得ているかもしれない。その日が本当にやってくるような予感が今からするのだ。

ゲラルド・ヤングの分厚い書籍を一通り読み終えた後、私は休憩を兼ねて、埴谷雄高著『死霊』を読み始めた。この小説も非常に分厚く、900ページほどの内容を持つ。毎日この小説を読んでいるわけではないが、この小説を開く日には、必ず一章ずつ読むことにしている。今日は第六章を読んだ。

本章の中に、とんでもない言葉が所々に散見され、それらに出くわすたびに、私は立ち止まってその箇所を注意深く読んでいた。自己の存在について、自分では生み出しえない表現で記述される文章を読むたびに、一歩先に行くこの先人に対する深い共感の念を持った。共感に満ちた気持ちで文章を読み進めていると、ふと、現代社会に向けて何かを書くことはあっても、現代社会に迎合する形で何かを書くことはない、という思いが自分の内側から滲み出てきた。これは折を見て湧き上がってくる思いではあるが、今日のそれは、改めて自己の方向性を見定めるようなものであった。

午後からは、再びヤングの書籍を読み、納得のいくところまで読み進めることができれば、出版記念ゼミナールに向けた資料作りに取り掛かりたいと思う。これは、一昨日から楽しみにしていた創作行為である。2017/7/6

1269. ゲラルド・ヤングの書籍より

一日の仕事が全て終わり、ようやく一息をつくことができそうだ。今日は早朝より仕事を順調に進めることができたが、七月末に開講するオンラインゼミナールの説明資料において、書籍に掲載されていない事柄を盛り込み過ぎてしまい、その調整に少しばかり手間取った。

明日も午後から説明資料の作成に取り掛かり、可能であれば明日中に初回のクラスの資料を全て完成させたい。初回の資料が完成したら、そこから二・三日は資料作りから離れ、その後再び第二回と第三回のクラスの説明資料を一気に作成したいと思う。八月にはノルウェー旅行が控えているため、ゼミナールの開講前に全ての回の説明資料の大枠を作成できたらと思う。そのような計画を立てて作業を進めていくつもりである。

説明資料の作成の合間合間に、ゲラルド・ヤングが執筆した分厚い専門書に目を通してしていると、幼児期の教育が発達に及ぼす影響は多大なものであることに改めて気付く。普段私は、成人期以降の発達現象に関する研究や実務に従事しているため、幼児期の発達現象に注目することは少ないが、折を見て、幼児期の発達現象に関してハッとさせられることが多い。

今日も、ロビー・ケースの発達理論やジョン・ボウルビイの愛着理論に関する記述を読んでいると、幼児期の教育について深く探究するべきであるということを思い知らされた。無知というのは、悪意がなくても害悪を生じさせることが多い。とりわけ、人間発達に関する無知というのは、取り返しのつかない害悪を人に与えてしまうことがあることを忘れてはならない。特に、幼児期の発達プロセスやメカニズムについて無知であることが、その子供に多大な害悪を及ぼしかねないことには多大な注意が必要だろう。

「正しさ」を議論するのは極めて難しいが、発達科学の知見を学べ学ぶほど、極めて害悪な幼児教育がなされている状況を的確に捉え、新たな発想の枠組みや教育方法を提唱することは可能にな

るだろう。おそらく今後の私は、成人以降の発達に関する研究や実務を続けていきながらも、幼児教育に関しても何らかの提言をするような仕事をしていく必要があることを強く思う。

人間の発達というのは、幼児期から老年期にかけての包括的なプロセスであるがゆえに、全発達範囲を射程に入れた仕事をしていきたいと思う。そのような気持ちにさせてくれたのが、ケースやボウルビィの仕事であった。2017/7/6

1270. 夢の中での思考

今朝は五時過ぎに起床した。五時半から書斎の机に着く。最初に、昨夜見た夢の内容について振り返ろうとしていたが、昨夜の夢はそれほど印象的なものではなかった。もちろん、そうした解釈を下すのは、覚醒意識における私である。そのため、昨夜見た夢の中に、覚醒意識の自分が見逃していることが多々あるかもしれない。すでに断片的な記憶になりつつあるが、夢の中で私は、学校の校庭にいたことを覚えている。

運動会の定番である、生徒一同による行進の最前列に私はいた。行進の途中で、中学校時代にお世話になっていた数学担当の先生から突然、行進に関する注文を受けた。それはユーモアのある内容であり、私自身ユーモアを好む傾向にあるため、先生の案を実行に移そうと思ったが、少しばかり躊躇する自分がいた。それを結局実行に移せなかったのは、日本的な恥の気持ちが私に生じたからであった。

その感情は、紛れもなく日本的な恥に該当するものであり、西洋的なそれではない。おそらく、西洋人もそれに近い感情を抱く可能性はあるだろうが、決して私がその時に感じていたような強度でその感情を感じることはないだろうし、その発生要因や発生後の身体表現においては随分と異なるものがあるだろう。

行進を終えた後、私は、大学の物理学科に所属する友人から数学的思考について話を聞いた。彼の説明をすべて聞き終えてから、説明の要点をまとめると、数学的思考の要点は、記憶と逆算的発想であった。なぜ私がそのような要点を抽出したのかはわからないが、彼の説明を凝縮させればそのようなになる。しかし、それらの要点を解凍したら彼の説明のようになるかはまたしても定かではない。

凝固と解凍のズレ、つまり、帰納と演繹のズレのようなものを見て取ることができる。それに気づいた時、思考が拡散し、人に何かの確からしさを主張する時に、「背理法的説明」を施すことは面白いかもしれないと思った。要するに、主張したい事柄が誤りであると仮定し、その後説明を続ける中で矛盾を導き出し、主張したい事柄が誤りであるという仮定が誤りであるというところに到達させ、結局は主張したい事柄が正しいものであることを伝える方法である。

そうした一連の思考が終わり、友人の顔を見た。しかし、そこにいたのは見知らぬ人間だった。だが、その人物が「友人らしさ」のようなものを発していたのは確かである。その人物は静かに消え去り、残っていたのはその友人らしさの感覚だった。

ひょっとすると、私が言語的にある人物を友人だと措定するよりも先に、感覚的にその人物が友人であるか否かを判断することが行われるのかもしれない。この「友人らしさ」の感覚は、様々な度合いを持ち、その度合いが高いほど、その人物を親友とみなすことにつながるということがわかった。

校庭に置かれたサッカーゴールの前で、私はずっとそのようなことを考えていた。その場から立ち去ろうとした時、その友人らしさの感覚は、一人の人間と別の人間の「魂の距離」であることがわかった。その距離の近接度合いが、友人関係を決定づけるようであり、その距離は時の経過と行動に応じて変化するものもあれば、一切変化することのないものもあることが判明した。そのような気づきを得たところで私は夢から覚めた。

五時を少し過ぎたばかりのフローニンゲンの朝は、まだ薄暗かった。寝室の窓から、まさに今から昇ろうとしている太陽が見えた。目の前の家の屋根の上から顔をのぞかせた真っ赤な朝日は、とても美しかった。今日もなすべき事をなそうという気持ちになった。2017/7/7

1271. エーリッヒ・フロムの仕事から

今日はこれから、エーリッヒ・フロムの“Escape From Freedom (1941)”とジャン・シノットの“The Development of Logic in Adulthood: Postformal Thought and Its Applications (1998)”に取り組む。昨夜少しばかり、フロムの書籍の冒頭部分だけを読んでしたが、第二次世界大戦の前に執筆された本書には、この現代社会を取り巻く状況に対しても当てはまるような洞察が盛り込まれていることがすぐにわかった。

人は自由を獲得することを希求しながらも、金や権威に飲み込まれることによって、結局自由から遠ざかっていく姿は、昔も今も変わりはないだろう。また、フロムが序章の中で指摘しているように、私たちは自由から遠ざかっていくのみならず、機械化された社会の中に組み込まれることによって、ますます自律性を喪失し、機械的な人間に墮していく様子というのは、人工知能が台頭する現代社会においてますます加速する傾向なのではないかと思う。

フロムの問題意識と私のそれは大きく合致しているようであり、この書籍は今読むべきものなのだと思う。本文をじっくり読み始めるのは今日からだが、フロムが本書を通じて、人々に新たな認識をもたらすことを主題としていたことに励ましを受けた。フロムは間違いなく、当時の社会のあり方や蔓延する発想の枠組みに対して危機感を持っていた。そして、そうした強い危機意識をもとに本書を執筆したということが、冒頭の文章だけからでも十分に伝わってくる。

こうした危機意識というのは、一人の個人の中で保持されているだけでは集合的な変革に一切繋がらない。そこにはやはり、危機的状況の冷静な分析と自らの実存的な危機意識の共有が必要となる。あるいは、自らの強い危機意識をもとにした冷静な分析があり、そこから新しい発想の枠組みを提唱することによって、人々に新たな気づきをもたらし、これまでとは異なる発想の枠組みを獲得させるような取り組みが非常に重要になる。

まさにフロムは、本書を通じてそのようなことを試みていたのだと思う。そうした姿勢に共感と感銘を受けたがゆえに、午前中はまずこの書籍を読むことから始めたい。本書を読み終えたら、シノットが編集した書籍に移る。本書は、ピアジェが提唱した形式操作段階の思考の枠組みを超えて、後形式操作段階の思考特性に特化した内容となっている。

本書を随分と前に購入し、その時に簡単に目を通していただけであったこともあり、腰を据えて本書を読みたいという気持ちに昨日ふと襲われた。私の記憶が正しければ、本書は後形式操作段階のみならず、「後・後形式操作段階(post-post formal stage)」の思考特性についても言及している。こうした高度な思考段階は、現実世界では滅多にお目にかかることがないため、このところはその段階の思考特性に関する探究から意識的に距離を取っていたが、久しぶりにこの段階の思考特性に触れてみたいと思うような気持ちが喚起された。午前中は、まずこの二冊に集中したいと思う。

2017/7/7

絶えず自己の内側から現象を捉え、それを自分の言葉として刻み込んでいく日々が、一日、また一日と過ぎていく。そうした一日は、とても儂いものとして過ぎ去っていくのは確かだが、それは他の何物にも代えがたい一日として自分の内側に刻印されていくのがわかる。欧州での毎日は、こうした日々の積み重ねから成り立っており、これが生きることなのかもしれない、という思いがある。

昨日、洗面所の明かりをつけた時、なぜ自己から出発し、自己に帰還しなければならないのかについて考えていた。究極的には、それが自己の本質であり、それが生きること他にないといか言いが無いが、自己の成熟の観点をを用いることによって、少しばかり考えを前に進めようとしている自分がいた。

自己というダイナミックシステムが発達を遂げるためには、そもそも以前の段階特性を受け継ぎながらも、そこから新たな段階特性を獲得していかなければならない。ここで、以前の段階特性を引き継ぐためには、必ず自己言及的に以前の段階を措定するような運動をしなければならない。自己言及というのはまさに、自己からの出発であり、自己に帰還することである。私たちの自己は、絶えず自己言及運動を続けることによってしか、成熟の道を歩んでいくことはできないのだ。

仮に、自己から出発することなく、自己の外から出発を始めてしまつては、自己が深まりを見せることはない。それは単純に、出発地点が自己の外にある場合、自己に帰還することが起こらず、自分の内側に刻印されていくものが何もないからである。

そのようなことをぼんやり考えていると、ダイナミックシステムとしての自己が成熟をしていくためには、単にそのシステムが外側の環境に対して開放的なだけではダメなのだ気づく。出発地点が自己にない形でシステムをオープンなものにすれば、たちまちそのシステムは外部環境と同一化してしまふ。そうなれば、二度と自己の立脚地点に帰ってくることはできないだろう。自己というダイナミックシステムを成熟させていくためには、開放さを与えることよりもまず先に、徹底的な自己言及機能を獲得しなければならないのだと思う。

絶えず自己から出発し、絶えず自己に帰還する過程を通じてしか、私たちの自己が深まることはないだろう。そのようなことを考えていた。

午前中の仕事に取り掛かる前に、再度書き留めておきたいことがある。それは知識の体系化に関するものだ。知識の体系化が進まない理由として、一つにはそもそも体系化された知識を習得することに努めていないからではないか、という考えが浮かんできた。知識の収集にいそしむ人を時折見かけるが、結果としてそれが功を奏しないのは、それらの知識が散逸的だからだろう。

散逸的な知識をいくら獲得したとしても、それが体系的な知として結晶化されていくのは稀である。体系化されるべき知識というものが、そもそもある体系の中に組み込まれたものである以上、その体系を通じて知識と向き合っていくような姿勢が必要であり、それと合わせて、独自の知識体系を自ら構築していく姿勢を持つことが大事になるだろう。

私も日々、関連性の無いような知識群と向き合っているが、その奥には必ず何らかの体系が潜っており、その体系を掴みながら、自らで知識の体系化を新たに試みていくというような実践を心がける必要があるだろう。仮にそれがいくら断片的な知識に見えたとしても、その背後にある体系を見出し、それらの知を体系化されたものに組み替えながら新たな知識体系を自分の中に構築していくことが重要になる。そうした実践をしていかなければ、いつまでたっても知識が一つの体系になることはないだろう。そのようなことを備忘録として書き留め、これからエーリッヒ・フロムの書籍に取り掛かる。

2017/7/7

1273. ハイドンとフロム

今日は朝からハイドンの交響曲を絶えず書斎に流している。このCDには、ハイドンが残した106のすべての交響曲が収められており、それを全て聴くには膨大な時間がかかる。これと合わせて、モーツァルトの全ての交響曲が収められたCDがセットになったものがデータとして取り込まれており、総時間数は48時間近くになる。それにしても、ハイドンがこれほどまでに多くの交響曲を残していたとは知らなかった。

今年の春にウィーンを訪れた時、ハイドンの記念館の存在に気づいていたが、私は足を運ぶことをしなかった。その時はまだ、自分の中でハイドンがどのような作曲家であり、どのような曲を残しているのかわかっていなかったからである。この多産な作曲家の曲を聴きながら、午前中から昼食後に

かけて二冊の書籍を交互に読み進めていた。先ほど、エーリッヒ・フロムの“Escape From Freedom (1941)”を読み終えた。

随分と下線や書き込みをしながらこの本と向き合っていたように思う。フロムの書籍とゆっくり向き合ったのは今回が初めてであるため、フロムが個人と社会に関する発達論者の側面を持っていることに驚かされた。とりわけ、それは両者の正の発達現象ではなく、負の発達現象、すなわち精神病理に関する洞察が非常に深いことに感銘を受けた。また、個人の精神特性は固定的なものではなく、可変的なものであり、動的に変化するという発想を持っているあたりに、ダイナミックシステム理論に通じるような発想を見て取ることができる。

あえて表面的な印象をもう少し列挙すれば、フロムを捉えて離さない中心主題のひとつは、「疎外」と「孤独」を取り巻く自由の問題であった。この問題は、私が欧州で生活を始めて以降強く意識するようになったものであり、当該箇所については実存的な読みを行っていたように思う。自分の主題と合致する箇所に差し掛かると、フロムという存在が近づいてくるような感覚があった。逆に私が関心を持たないテーマについては、フロムという存在が遠ざかっていく。

読み手と著者のこうした関係は興味深く、読み手としては、自らの関心テーマを常に念頭に置きながら、自分を捉えて離さない主題がいざやってきたところで、著者と真剣な対話をするような態度が求められるだろう。こうした対話がなされる時、読者は真の意味で著者から刺激を受け、自分が抱える既存の問いと向き合うことを促される。その促しによって、新たな問いが生まれ、その新たな問いが既存の問いを解決することが起こりうるのだ。

まさに、私たちが問いを解決するのではなく、問いが問いを解決するという循環をそこに見て取ることができる。そして、私たちの内面が真に成熟していく過程というのは、自らが問いを解決するプロセスというよりも、問いが問いを解決する流れの中に自己を位置付けるプロセスのような気がしている。

まさに、フロムの書籍を読むことによって私の内側に起こっていたのは、そのようなプロセスの一端だった。フロムから得られた促しをもとに、これから夕方の仕事に取り掛かりたい。2017/7/7

先ほど、わずか数分間だが、通り雨がやってきた。あたかもそれが幻想であったかのように、今は晴れ間が空に広がっており、遠くの方で小鳥の鳴く声がある。穏やかな太陽光が降り注ぐ夕方の中で、私は少しばかりサンフランシスコ時代のことを回想していた。個別具体的な出来事を思い出していたというよりも、それらの全体を包む印象のようなものを思い出していた。

すると、とても些細なことながら、フローニンゲンの夏の気候はサンフランシスコの夏の気候に近いことに今さらながら気づいた。気温だけを取ってみると、まさに両者の夏の様子は似ている。実際に、お互いの現在の気温を比較してみると、ほぼ同じであった。ただし、両者には違いもあり、フローニンゲンの方が日が長く、サンフランシスコの方が快晴の日が多いということだろう。そのような取り留めもないことをぼんやりと考えながら、私は窓の外を眺めていた。

先ほど読み終えたフロムの書籍について、書き留めていないことがまだいくつかある。これはユングの個性化の問題ともつながってくるのだろうが、フロムも同様に、現代社会において個性化を果たすことがいかに難しいかを説いていた。私たちの社会は、個人の集積体であるにもかかわらず、社会が保持する集合意識というのは、私たち個人個人の意識をたいていの場合凌駕している。つまり、集合的な意識を乗り越える形で個人としての意識を確立していくことは極めて困難なのだ。

やはり、社会の集合意識というのも一つのダイナミックシステムに他ならず、個人の意識の上に集合の意識を安易に重ねてはならないのだが、個人の意識の総和としての集合意識は、一つ一つの部分である個人の意識を圧倒するような力を持つ。この点に、個人が集合意識を超えて個としての意識を確立していくことの困難さを見て取ることができる。

現代社会において、私たちを取り巻く集合意識そのものが病理的な様相を見せはじめ、その病理は私たち一人一人に飛び火している。ここに現代社会を生きることの二重の苦しみがあるように思える。こうした状況から個人として脱却し、そして集合意識の病理の解決にあたるためには、そもそも個としての自己を確立することが真っ先に求められるのではないだろうか。自らの中に個を確立しなければ、そもそも集合意識の渦から外に出ることなど不可能である。

また、個の確立がなければ、絶えず集合意識の枠組みを通じて発想しなければならず、それを俯瞰するような眼を持ち得ないがゆえに、そうした集合意識の問題に取り組むことなどもできないだろう。第二弾の書籍の中で私が訴えていた、「自らの声を確立する」という主題は、こうした問題意識と直結している。

フロムが指摘しているように、個であることを放棄した者は、社会や文化の枠組みに従順になって形作られる、人間の姿をした大量生産品に成り果ててしまうだろう。一方で、一つの個を確立することは、社会や文化の枠組みを超えて生きることを私たちに要求してくるがゆえに、必然的に孤独さを伴う。しかし、こうした孤独さに屈してしまうと、私たちは自己を喪失する。そのようなことを考えると、一つの個を確立するということは、相当に厳しい道なのだと思う。

社会や文化の枠組みによる同質性から脱却し、それでいて孤独さに屈しない精神を持たなければならぬ点に難しさがあるのだ。しかしながら、現代を取り巻く社会的な病理とそれが派生して私たち一人一人に生じさせている病理に気づくとき、一つの個を確立するという過酷な道にもはや踏み出さざるをえないのではないかと思う。さもないと、この問題は解決に向かうどころか、問題がますます深刻化していくように思えて仕方ない。2017/7/7

1275. 夢と現実が織りなす一つの現実世界

昨夜はいつもより早めに就寝し、目覚めてみると今朝の起床はとても清々しかった。早朝の天気は曇りであったが、私の精神は晴れ渡っているかのようにであった。やはり十時前に就寝するというのは、自分に最も合った生活リズムなのかもしれないと思う。

昨夜も少数のまとまりを持つ夢を見いていた。しかしながら、断片的な記憶をたどってみると、内容としてそれらは書き留めておくに値しないように思える。旧友と一緒に瀬戸内海の海辺を歩く夢であり、そこであれこれ話を聞くような内容を持つ夢。

そして、海の家からどこか別の場所にバスで移ろうとするような夢であった。ある時から夢を意識的に書き留めようと思うようになり、それ以降、夢を夢として片付けない自分、つまり夢を現実の一つの側面としてみなす自分が強くなりつつある。夢というのも時間や空間と同じであり、言葉によってリアリティのある側面が切り取られたものであり、切り取られた末に同定される一つの現象に過ぎない。

ここで私は、それらが言葉によって同定される前のリアリティそのものに帰ろうとするような試みを仕掛けていた気がしてならなくなってきた。

もう一度、言葉以前のリアリティに立ち返ろうとする衝動が、自分の内側に確かに存在している。こうした立ち返りを継続していると、夢が夢以前の状態に帰っていくのがわかる。すなわち、夢が元々の大きな全体のリアリティに編み直されていくのがわかるのだ。そのおかげもあってか、今は夢と現実を無意味に区切ることなく、有意味に同一化させることによって日々の現実世界を生きているように思える。

昨夜の夢の中のイメージや感覚が、今この瞬間の自分の内側に再想起され、それが自分の脳内に刻み込まれていることから、それらが一つの大きな現実世界の中の出来事であったことに変わりはない。夢の中の出来事も現実世界の出来事も、この一つの大きなリアリティの中の出来事なのだ。

昨日の午前中は思考が明瞭であり、集中して随分と多くの文章を読むことができていたように思う。その中で、人は死を遅らせようとするくせに、成長を早めようとするという逆説について考えていた。

到来を遅めようとするものと到来を早めようとするもの。どちらに対しても、私たちは不必要な介入をしがちであり、明確な態度を持って待つということができないようだ。人間は、自らを取り巻く多くの逆説に無知であり、逆説の中を生きることを宿命づけられているのかもしれない。

ただし、夢と現実の逆説的な関係から離れ、さらに一つの大きな関係性の中で夢と現実を捉えることが可能であるように、死と成長についても同様のことが行えるのではないだろうか。また、私たちはそれを行う必要があるのではないだろうか。つまり、死と成長を対置させるのではなく、それを一つの大きな関係性の中で捉えるのである。

そもそも、死と成長の間に横たわる不可分の関係性に気づけないがゆえに、死を無理やり遅らせようしたり、成長を強引に早めようとするような暴挙に出るのではないだろうか。夢から覚めるというのは、夢から現実に戻ってくることを指すのではない。夢と現実が織りなすさらに大きな一つの現実世界に気づき、それに参入することを意味するのだ。死と成長についても全く同様の認識変換が必要に思える。2017/7/8

1276. 人間が真に人間になる時

—人間は自己の中の至高の部分を追究することによって初めて人間となる—アンドレ・マルロー

静止画のような微動だにしない世界が窓の外に広がっている。風の動きも一切なく、動物が動く姿も見られない。この世界が完全に停止してしまったかのような姿がそこにある。

昨日、夕食を摂りながら、来年はオランダで生活を続けるのではなく、やはり米国に戻ろうかとふと思った。これは今決めることでは決していないのだが、そのようなことをふと思ったのだ。オランダのフローニンゲンという街は、私が仕事に打ち込む上ではこれ以上ないほどの環境を提供してくれる。

この地での二年目の生活が終わった後も、さらに一年この場所に滞在できる資格がすでにあることを知っている。フローニンゲンでさらに一年の生活を送るということ、つまり欧州で三年間ほどの生活を送ることの意味は計り知れない。それにもかかわらず、気持ちは米国に再び戻ることへ傾いている。遅かれ早かれ米国に戻るようになるのは知っていたが、今の私にとっては来年がそのタイミングなのではないかと思う。

この10年間を振り返ってみた時に、同じ場所に三年以上留まることができないという傾向はまだ続いているようだ。米国に戻るとするならば、長らく私が生活していた西海岸ではなく、オランダから近い東海岸になるだろう。

昨夜、偶然にもフランスの作家アンドレ・マルローが残した「人間は自己の中の至高の部分を追究することによって初めて人間となる」という言葉に出会った。この言葉を見たとき、昨日読み進めていたエーリッヒ・フロムの書籍の中で書かれていたことと重なるように思えた。

結局私たちが一つの個としての自覚を持ち、それを明確なものとして確立することができないのは、自身の内側に宿る至高の部分に無自覚だからなのではないだろうか。あるいは、そうした部分への追究に怠惰だからなのではないだろうか。今、問いかけの形式でそれを書いたが、それは強い意志を伴った解答の提示であるように思える。人間が真に人間になるというのは、生半可なことではないのだ。

昨夜、米国のテレビドラマ“Person of Interest”の中のある一話を視聴したが、そこでは人工知能によって人間が交換可能か否かを判断されるシーンがあった。残念ながら、一つの個を持たない、社会の思想や仕組みによって画一的に大量生産された人間は、本当に代替可能なものとして扱われる日が近づいているような戦慄を覚えた。同時にそれは、やり場のない憤りの感情を私にもたらしめた。なぜ私たちは、自身の内側にある至高の部分に目を当てようとしなのだろうか。自己の至高性とは全く関係のないものを、どうして外側に求めようとするのだろうか。

マルローやフロムの言葉は、現代を生きる私自身が、もう一度自己について深く考えることを促した。

静止画のような外界の景色に少しばかり動きが現れ始めた。それでも辺りは相変わらず静かである。聞こえてくるのはハイドンの交響曲だけである。しかし、私はそこに自らの鼓動を聞き取らなければならないのだと思う。また、自らの内側に流れる血潮の躍動を感じ取らなければならないのだ。さもないと、自分の中に宿る至高の部分を見出すことなど一生できないだろう。2017/7/8

1277. エグゼクティブマインド

小さく美しい鳴き声を奏でるいつもの小鳥ではなく、カモメが独特の鳴き声を発しながら空を飛んでいく姿を見た。書斎の窓からカモメを見ることは滅多にないため、とても新鮮であった。

早朝からおとなしくしていた天気は崩れ始め、突然雨が降り始めた。数日前に四日分の食料を購入しておいて正解だったと思う。降りしきる雨を時折眺めながら、森有正著『デカルトとパスカル』を開くことにした。昨日の予定では、今朝は“The Executive Mind: New Insights on Managerial Thought and Action (1983)”を読もうと考えていた。

本書は、発達心理学の観点から企業社会におけるエグゼクティブの思考形態を取り上げたものであり、出版年は古いですが、内容としては今読んでも洞察に溢れるものである。日本でお馴染みのクリス・アーギリスやヘンリー・ミンツバーグも本書に論文を寄稿しており、拙書『成人発達理論による能力の成長』の中で言及したビル・トーバートやデイヴィッド・コルブも本書に論文を寄せている。

本書の中で私が最も注目しているのは、カール・ワイクが執筆した論文である。発達心理学者のロバート・キーガンは“meaning-making”という言葉の提唱したことで有名だが、カール・ワイクは“sense-making”という言葉の提唱したことで有名である。

今からおよそ四年前に、私がオットー・ラスキーに師事していた時、ラスキーはキーガンの“meaning-making”のみならず、ワイクの“sense-making”という言葉の頻りに用いていたことをふと思い出した。あれから四年が経ったというのに、私はまだ後者の言葉に最適な日本語を見出せずにいる。自分の内側の中に絶えずそうした未消化感があり、顕在意識に上らない悶々とした思いが自分の中に四年間ほどあった。数日前にワイクの他の論文をダウンロードしたのはおそらく、ようやくその言葉を真に咀嚼するべき時が来たことを示しているのかもしれない。

米国で過ごした最後の年以降、日本の企業社会と再び接点を持つことになり、中でもエグゼクティブの思考形態というのは私が密かに関心を寄せていたテーマである。これまでは課長や部長などのマネジャーを対象とした仕事をする機会が多かったが、そうした中であつても、なぜか私の関心はエグゼクティブの思考形態にあり続けた。それはおそらく、エグゼクティブが置かれている環境の複雑性とそれに伴う彼ら自身の思考の複雑性によるだろう。

マサチューセッツ州のレクティカに在籍していた時に、エグゼクティブの能力測定に従事することがあり、エグゼクティブが獲得している高度な能力に対して、時に感銘を受けることがあつた。これは一人の研究者としての純粋な探究心によるのだろうが、研究対象とする能力が複雑であればあるほど、高次元であればあるほど、私の関心を強く惹き付けるというのは偽ることのできない事実である。そうしたこともあり、マネジャー層の能力測定や能力開発のみならず、エグゼクティブに対するそれらに強い関心があるようなのだ。

午前中に読み始める予定であつたが、本書を午後からゆつくりと読み進めたいと思う。何気なく文章を書き留めていると、雨がいつの間にやら止んでいることに気づいた。あと一日分ほどの食料はあるが、明日は晴れとの予報があり、ランニングに出かけたいため、トレーニング後に摂取すべき食べ物を含め、今から買い物に出かけたい。

知らず知らずのうちに、夏季休暇が始まってから三週間弱の時間が過ぎていることに気づいた。当初の予定に反するかのように、そして探究の本質に合致するかのように、私の日々の歩みはゆっくりと進んで行く。2017/7/8

1278. 「懐疑」のための方法論の形成へ向けて

早朝の雨から一転して、午後からは晴れ間が広がった。雨の影響もあつてか、少々湿気が多いように感じる。

オランダでの生活を送りながら、今から400年近くも前にオランダで生活を送っていたデカルトの日々の探究姿勢に思いを馳せていた。森有正先生の書籍を午前中に読んでみると、デカルトがオランダにやってきたのは、窮理の解明に徹するために必要な静寂さを求め、静寂さの中で、世の福祉に資する学術的方法体系の樹立にあったことを知る。

デカルトは、徹頭徹尾、静寂さの中で自己開発に努め、そこで獲得された認識と認識方法を世界に共有することを一つの使命として掲げていた。デカルトの言葉一つ一つに、実存的熱気を感じ取ることができる。

これは広く知られたことかもしれないが、デカルトは形而上学的な探究のみならず、物理や医学などの幅広い自然科学領域の探究を進めていた。デカルトは、そうした自然科学の探究の成果を公にしないことは人類に対する害悪であるとみなし、科学の探究に関して共同性を絶えず強調していた。

自己探究や自己開発と並行して、科学的探究の末に得られた知見を公の知にしていこうとするデカルトの姿勢に、改めて大きな感銘を受けた。森先生の『デカルトとパスカル』をこれまで開くときは、一章だけ読むようにしていたのだが、今日は熱に浮かれて二章ほど読み進めた。二章を読み進めた後、書斎のソファの腰掛け、天井に向かって頭を持ち上げながらしばらく目をつぶっていた。すると、意識が完全に無くなり、夢を見ない深い意識に参入していた。

20分後、その世界から戻ってきた私は目を開けた。その間に起こっていたのは、無の世界の中にいることだけである。

デカルトは、思考即存在を提唱したが、思考すら存在しない世界の中にいた私は、果たして存在していたと言えるのだろうか。思うことによって存在するのであれば、思うことが介在しえないその時の私は存在していなかったことになるのだろうか。存在の謎は深まるばかりである。

これまで私は、存在の問題と経験的にぶつかることが多くあったが、その時にいつも私は、存在に対する漠然とした疑いしか持っていなかったことに気づかされる。それはデカルトが「懐疑」という方法を採用したのとはまるつきり異なっている。デカルトは、対象を漠然と疑うのではなく、全ての対象に対して方法的に思考することを自らに課していた。そこには精神の厳密な方向付けと、精神の厳格な操作があった。

これから私は、対象を漠然と吟味するのではなく、自分なりの方法論をもってしてそれらを吟味していかなければならないだろう。先ほど私を襲った無の世界への参入に関しても、いったい自分は何度これを経験すればいいのかわからないぐらいに、この経験を通じて何も得ていない。それはひとえに、その出来事が方法論の欠如による惰性的体験に成り果ててしまっていたからだろう。そのように考えると、方法論の形成は急務であるが、それは一夜にしてならずであることを肝に銘じておかなければならない。夕食後からの仕事もそこに向けた一つの礎としたい。2017/7/8

1279. 夢と現実の境界線

—おそらくいつか私たちは、夢と現実が重なり合う場所を見つけることになるだろう—出所不明

早いもので、夏期休暇に入ってから三週間ほどが経とうとしている。ここまでの三週間は、休暇前の過ごし方と特に変わることがない。それよりもむしろ、休暇前以上に自らが打ち込むべき対象に向き合っているように思える。すでに朝日が昇り、清々しい日曜日の朝を迎えた。

時刻は七時を過ぎたが、通りを歩く人もおらず、通りを走る車もない。人が築き上げた家々と取り巻く自然だけがこの世界にあるかのような印象をもたらす。

赤レンガの家の屋根の上で、数羽のカラスが戯れている。同時に、別の方角からハトの鳴く声が聞こえる。こうした静寂さがいつまでも続いて欲しいと思うような世界が、今自分の目の前に広がっている。静寂な世界の中で、またしても今から一年後に米国に戻るのかどうかを少し考えていた。

思うに、顕在意識の自己が変化を求めているのではなく、潜在意識の自己が変化を強く求めているようだ。顕在意識の変化欲求であれば、それは理性によって統制することができる。しかし、潜在意識のそれは、欲求を超えて能動的な衝動となり、抑えることは誰にもできない。近い将来、新たな挑戦が自分を待っていることをこの瞬間に知る。

昨夜は夢の中で、大学時代のゼミの友人たちと再会を果たした。各々が何か打ち込んでいるようであり、私もその一人だった。お互いに近況を報告し合い、旧交を温めた後に、私はふと、社会と数学の試験が迫ってきていることに気づいた。

過去数年間は入念な準備をして試験に臨んでいたが、今年からは自らの探究すべきものを発見し、こうした試験に労力を注がないような方針を自分で固めていたようだ。こうした方針を自らで設けたこと、その方針を実行に移すことは英断に思えたが、それでもこなさなければならない試験があることは事実だった。私は、社会のテキストの試験範囲をもう一度最初から読み直し、少なくとも五回は読み直そうと思っていた。

これまでは、日々数学の問題を解いていたのだが、今年からはそうした習慣を止め、試験の前にまとめて数学の問題を解くようになっていた。その点が少しばかり懸念材料となっており、数学の試験に向けた準備は難航するかもしれないと予想した。そこで私は夢から覚めた。夢から覚めた瞬間、社会と数学の試験に向けた準備を早速しなければならぬと思ったが、それは夢の中の話であると気づき、安堵した。

早朝に取りかかるべきものは、社会でも数学でもなく、アンドレアス・デメリオの“Cognitive Developmental Change (2004)”であることが、ひどく私を喜ばせ、大きな安心感をもたらした。夢と現実の境界線が一瞬消え去っていたことから、昨日考えていたように、夢と現実は一つの大きな現実世界の中にあることを知った。午前中はこの書籍を読み、昼食前にランニングに出かけたい。

2017/7/9

今という瞬間が、なんだかとても素晴らしく知覚される。この瞬間にも着実に時間が進行し、七月のある日曜日が終わりに向かっているのは確かなのだが、そうした時間の流れすらも些細なもののように思える気持ちがある。

アンドレアス・デメトリオが編集した“Cognitive Developmental Change (2004)”という書籍をちょうど半分ほど読み終えた。本書は400ページほどに及び、カート・フィッシャー、マーク・レヴィス、ポール・ヴァン・ギアートなどの発達科学の重鎮が寄稿した論文が収められている。

本書を読みながらふと、確かに私たちの能力は領域固有性を持つが、領域全般に作用する能力も存在するのではないかと思った。これまで、そうした領域全般的な能力を私はあまり認めようとしなかったが、潜在的にそうしたものが存在すると仮定した方が思考が前に進むような気がし始めたのである。

もちろん、私たちの能力は、常にある特定のコンテキストの中で特定の課題に対して発揮される。そのため、私たちの能力が領域固有性を常に内包しているというのは確かだ。だが、そもそもフィッシャーの理論モデルが領域全般型と呼ばれることを再度考えてみた時に、「点・線・面・立体」を構成する一般的な能力のようなものがあるかもしれないと思うようになった。しかし、こうした能力すらも具体的な課題を通じて成長していくがゆえに、領域固有的と見なされるかもしれないが、ここで仮定しようとしているのは、そもそも点や線といった骨組みそのものを構築していく能力である。

私の頭の中にはダイナミックシステム理論の体系があるため、その枠組みを用いれば、ここで仮定しようとしている能力は、点・線・面・立体を構築する「自己組織化能力」と呼んでいいかもしれない。私たちには内在的に、ありとあらゆる領域で、点・線・面・立体を構築する自己組織化能力のようなものが備わっている気がしてならない。

これは、IQのようなものとはやはり異なる。IQは一般的に領域全般的な能力だと信じられているが、IQですらも課題やコンテキストによって左右されるという性質上、それは領域固有的な能力である。点・線・面・立体を構築する自己組織化能力というのは、IQのような能力ですらない。

私たちはどうやら、点・線・面・立体を構築する自己組織化能力という領域全般的な能力を、特定のコンテキスト内の具体的な課題に対して発揮するという、領域固有的な能力に変換する形でこの現実世界を生きているのではないだろうか。

ただし、繰り返しになるが、点・線・面・立体を構築する自己組織化能力は固有の領域の中で発揮されるため、そうした自己組織化能力を単独に取り出して測定することは不可能である。それは絶えず課題やコンテキストと密接に関係しているがゆえに、それそのものを測定することは不可能だが、全ての能力の成長プロセスの中に見られる骨組みそのものを構築するような力としてその能力が存在している気がしてならない。2017/7/9